

コメント

「死者と生者の共同性」における マイクロヒストリーや「非常地帯」的なもの ——渡辺哲夫の論文を読んで——

ファビオ・ランベッリ

このセッションの論文は様々な分野の中で様々な具体的なケーススタディーを分析しながらそれぞれの立場で「死者と生者の共同性」を論じているのだが、そこにはいくつかの共通性が見られる。それは、言語、表象、記憶（またはその削除）、そしてそれらを整理し解釈し組織化する実際の人生の中で蓄積される経験が「死者と生者の共同性」を構築し続けることである。なぜなら、生きるということは、ある意味、様々な記憶や表象の体系により生と死との関係（自分の、または他者の）を考え直すこと、あるいは換言すれば過去・現在・未来の人々の中の自分の位置付けや義務／責任を絶えず意識し調整することでもあると考えられるからである。この意味で「死者と生者の共同性」とは、文化記号論が呼んでいるセミオスフィアー（記号圏）——つまり、実在の文化と潜在的な文化の可能性の複合体というものの一種の同義語でもある。

私は「死者と生者の共同性」という視点から渡辺哲夫の論文を読んだとき、二つの重要な課題と直面させられた。一つ目の課題は、死生観の研究は焦点を変える必要があるのではないか、という点である。生と死、そしてその関係についての考察は、多くの場合は「宗教」「哲学」「文化」という、一般的な、規範的な、本質的に抽象的な次元で行われる。それに対して、より具体的、個人的、体験的、感情的、身体的な次元も忘れてはいけない、という極めて重要な示唆を受けたのである。

渡辺哲夫の論文も極めて単独の事件の研究である。その主人公の「一郎」

は殺人事件を犯した精神的に病んだ人間である。もっとも、それは「ただの」人殺しではなく、あの「気狂い」が自己の父を殺したという、「根源的」な殺人を実行したのである。この意味で、渡辺のケーススタディーは三つの周辺性に特徴付けられる。すなわち、(1)一般的な言説に基づく議論ではなくある個人の心境の研究であり、(2)その主人公は「平常」の人間ではなく「気狂い」であり、そして(3)犯罪者(人殺し)でもあるという三点である。我々読者は、自分達の中に潜んでいる暗黒の無意識の存在を知りながらも、その主人公とどこまで一体化できるのだろうか。

しかし、どんなに「一郎」と一体化し難いのにも拘らず、彼は本当はどこまで例外的なのだろうか。ある意味で、出生、生、死について考えるときは、我々もみなそれぞれ「例外」なのではないだろうか。なぜなら、我々はみな様々な「枠組み」(文化、宗教、言説等)を横断しながらそれぞれの個人的な記憶や表象を構築し調整し再建して生きているからである。

従って、このような、無数の個人的な立場を無視して本格的に「死者と生者の共同性」をどこまで考えられるのだろうか。個人的で感情的な側面は伝統的には「思想」ではなく「芸術」によって扱われてきたのだが、このような区別・対立はどこまで有効なのか。渡辺哲夫の論文ではこのようなことを考えさせられた。

この私の考えを根拠付けるものとして、M・フーコーとM・ド・セルトーの対立を思い出していただきたい。フーコーにとっては人間は様々な「制度」や「言説」によって作られているのに対して、ド・セルトーは各個人が様々な「戦術」を実行することによってそれらの「制度」や「言説」と闘い個人的な自由の空間を構築していくということを想定した。ド・セルトーが単独個人の学問まで想定していたように、個人の次元を超える制度や言説を否定しないまま個人の行動(思考)範囲を測定する必要があるのではないか、と私は考えている。もう一つの理論的な裏付けとしては、いわゆるマイクロヒストリーが挙げられる。カルロ・キンズブルグが『チーズとうじ虫』の中で

示したように、ある個人の世界観を研究することによってある地域、ある時代という「宇宙」をより忠実に理解できる。

渡辺哲夫の論文を読んで考えさせられた二つ目の課題は、以上のものとは異なる次元の問題である。すでに指摘したように彼の論文の主人公は人殺しである。ふだん、死や死者のことを考察するとき、死というのは自然の現象として考えることが多い。従って、「死者と生者の共同性」は一種の自然的世代の移り変わりの整理として理解されがちである。しかし、ここには根本的な問題がある。人間は死ぬと同時に、他の人間によって殺されることもあるのである。つまり、死生観を考えると人は人が殺すことを忘れてはいけない。「死者と生者の共同性」は歴史の中に絶えず起こる暴力、破壊、殺人、虐殺という暗黒の部分はどう処理するのか、という問題は非常に重要である（ジェイムズ・フォードの論文はこのテーマを扱っている）。いうまでもなくこのような問題はW・ベンヤミンの歴史論のもとにある「非常地帯」という状況を連想させる。国家、大衆、個人の暴力（殺人も含め）（換言すれば、国家、大衆、個人の暴力によって殺害された我々の死者）に対して、我々はどう考え、どう行動すべきか、という重要な課題がそこでは指摘されている。

最後に、ファイナルディスカッションで提出された二つの質問について触れたいと思う。一つは「死者と生者の共同性」は本当に必要なのか、死者を弔いあの世に送って忘れた方がいいのではないか、という質問であった。もう一つは、死者と生者の中で「共同性」の成立は可能であろうか、個人にとって関心のある唯一の死は己の死だけではないか、という質問であった。この二つの疑問は出発点の違いにも拘らず、共通の基盤を持つと考えられる。よくいえば「唯我論」、悪くいえば「个人中心主義」あるいは「自閉症」という基盤である。つまり、相手（他者）を認めること、相手とのコミュニケーションをとることの出来ない状況において、あるいはより根源的なレベルにおいて、我々の個人的な存在にとっての他者の不可欠性を認める能力の欠如である。これは現在の日本社会の底流にあるものとして受け止めるべき重

要な問題点である。唯我論あるいは自閉症は倫理、政治思想、あるいは日常の生き方の基盤になりうるかといえ、当然そうではないだろう。社会を支えるのは、おそらく各個人の欲望や思考を限界付けることだけではなく、過去の世代の存在に関する明確な意識や把握、そして無数・無名の他者をも含む将来についての像を持つことも必要であろう。これに関連して興味深かったのは、このシンポジウムの中で「出生」について誰も語らなかったことである。これもまた現在の社会状況の徴候であるかもしれない。この場合も、ベンヤミンやホルフハイマーが指摘した、我々が持つ「死者に対しての責任」というものを忘れてはならないだろう。

(ファビオ・ランベッリ 札幌大学文化学部日本語日本文化学科教授)